

# 専門は「永源寺」 —コミュニティを支える

外来診療をしながら、76人を在宅で診ているという、滋賀県・東近江市永源寺診療所所長の花戸貴司さん。「最期まで自分らしい生活を、自分の家で」と願う地域住民を支える医療を行っている。「先生の専門は」という質問には、「この地域が専門です」という答えが返ってきた。



インタビュアー：  
**上野谷 加代子**  
同志社大学社会学部教授、  
『月刊福祉』編集委員

**どんな名医よりも  
永源寺のことを知っている**

**上野谷** 先生のことを知った時には「こんなお医者さんがいるとは」とびっくりしました。

**花戸** 変わった医者でして(笑)。  
**上野谷** 先生は、めざす医師像をもっていましたか。

**花戸** いえ。医療との接点は、私が中学生の時に父親ががんになり、他界したことが、最初でした。その後、高校は進学校に通っていましたが、中高とバレーボール漬けの毎日でした。一方で、実家の和菓子屋の手伝いで配達をすることがあり、地域で暮らす高齢者の生活を垣間見る機会がありました。当時はまだ少なかったのですが、ひとりで暮らしている方もいて、「この人たちは、どのようなサポートを受けて暮らしているんだろう」と気になっていました。それで、進路を決める時に、地域や

社会で困った人の手助けができるような仕事がしたいと思うようになりました。そして、父親のがんの時に身近に接した医療者の姿が重なって、医師をめざそうと決めたのです。

**上野谷** とても優しい青年だったんですね。自治医科大学に進学されました。

**花戸** はい。卒業後は滋賀医科大学で2年間研修し、3年めから滋賀県の北部にある総合病院に勤務し、6年めから今の東近江市永源寺診療所にいます。自治医科大学の場合、出身に戻ってへき地医療に一定期間従事するという義務があります。その義務年限が過ぎたら大病院など、専門性を磨く道に戻ろうと思っていたのですが、気づけばもう14年めになります。

**上野谷** なぜ残られたのですか。  
**花戸** 地域の人たちと向き合っていると、抜け出せなくなって……。というよりも、楽しくなっ



## 花戸 貴司さん

東近江市永源寺診療所 所長

まったのです。

**上野谷** 「楽しく」とは？

**花戸** 病気を診るだけであれば大きな病院のほうが優れていると思います。でも、家族のことや日常生活、人生観などトータルで、この地域に住んでいる人たちを診るという意味では、どこの病院の医者にも負けない。そのことに、はたと気づいたのです。病気を診るだけではなく、病気になる前の予防、病気になった後の福祉のことなども含め、この地に長くいるうちに、私にしかできないことがだんだんと増えてきたように思います。

**上野谷** 永源寺地域に残ると決めた時には独身だったのですか。

**花戸** いえ。大学卒業直後に結婚し、ずっと家族に支えてもらっています。

**上野谷** パートナーは看護師で、一緒に働いていらっしゃいますね。

**花戸** 診療所は、医師は私ひとり

で、看護師は妻も含め5人。職員のマネジメントは私の担当ですが、お金のことは妻に任せています。

**上野谷** 先生のお気持ちを理解してください。先生がいたからこそ、今があるということですね。ところで、先生のご専門は？

**花戸** もともとの専門は小児科ですが、今は「専門は」と聞かれたら、「永源寺です」と答えるようにしています。「この地域が私の専門です」と。この地域のこと私がいちばん知っていますから。

**上野谷** 素晴らしいですね。

**隙間を埋めるのは地域の力**

**上野谷** お忙しいと思いますが、どんな毎日なのですか。

**花戸** 朝は7時に私が診療所の玄関を開けて、8時半から外来診療が始まります。ただ、胃カメラや腹部エコーなど空腹状態で行う検査の人は、外来が始まる前に診て



上野谷 加代子氏

しまいます。そのほうが空腹でいる時間が短くなりますから。そして午前の診察が終わったら、午後から訪問診療に出かけます。月、火、木曜日は午後の外来も行っています。

**上野谷** 今、在宅では何人くらい診ているのですか。

**花戸** 定期的に訪問しているのは76人です。半数の方は、月2回以上です。

**上野谷** さらに急患の対応など、とてもお忙しいですね。

になります。

**上野谷** 高齢者の生活を支援するサポーター組織が永源寺地域には組織されています。ないものに対して他者に依存するのではなく、自分たちで努力するという文化がここにはありますね。その文化をつくり出されたのが、花戸先生なのだろうと思います。そのエネルギーは一体どこから出ているので

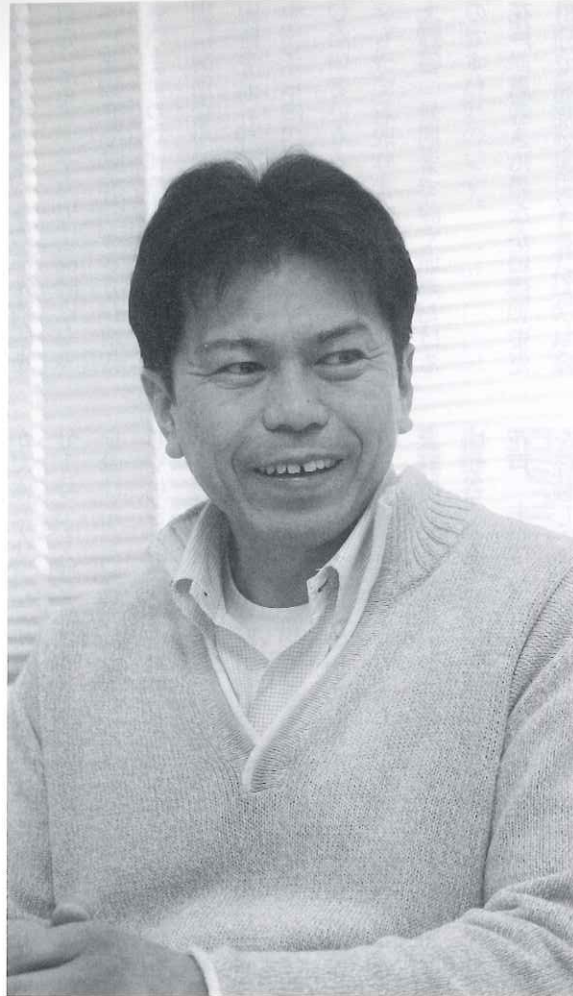
すか。

**花戸** 答えになるかはわかりませんが、医療にしても介護や福祉にしても、手を差し伸べるだけが優しさではないと思っています。その人自身も持っている自立する力を助けることが私たちの仕事であって、場合によっては一歩引いたり、見守ってあげることも必要なことだと思います。

**「最期まで自分らしく」を支えるのが仕事**

**上野谷** 永源寺地域の人口は、5800人ほどですよ。なかには大きな病院で診てほしいという方もいるかと思いますが、どのようにすみ分けされているのですか。

**花戸** 若い方や車を運転される方、あるいは町外に通勤されている方には、少し遠方の医療機関に通院されている方もいます。また、がんなどの重大な病気の場合、専門的な医療を希望されるの



**Profile**

はなと・たかし

1995年、自治医科大学卒業。滋賀医科大学で2年間の研修、湖北総合病院で3年間の小児科医勤務を経て、永源寺町（現東近江市）へ赴任。以来、東近江市永源寺診療所で地域医療を支えている。

ほしい」「こんな医療を受けたい」といったリクエストを受けることはありませんか。

**花戸** 都支部と違って、人材も設備も少ないことは確かです。例えば、リハビリは行っていますが、非常勤の理学療法士しかいませんので、訪問リハは厳しい。看護師も5人いますが、訪問看護までではなく、ほかの地域の訪問看護ス

テーションをお願いしています。でも、ないものをほしがっても仕方ありません。それよりも「隙間」をいかに埋めるかを考えています。医療や介護は公的保険による「共助」ですよ。その共助と患者さんという個人の「自助」との間の隙間を埋めるには、地域の方々、ご家族、ボランティアによる「互助」のつながりが非常に力

は当然ですから、もちろん病院を紹介します。一方で、高齢になつて、認知症や障害のある方が増えていきますので、そうした方は診療科に関係なく診察します。通院が困難であれば、往診にも行きます。さらに、終末期もここで暮らしたいということでしたら、責任をもって看取りまで対応します。

**上野谷** 最期まで診ていただけのですね。  
**花戸** 患者さんのなかには、まだ自分で通院できるうちから、「はよ参らせてほしいわ」とおっしゃる方がいるんです。早く死なせてほしい、と。医学用語に変換すると「希死念慮」になるので、自殺しないように約束するというのが教科書的な対応です。でも、次の診察時には野菜を持ってきてくれたりするんですね。最初は「はよ参らせてほしい」の意味がわからなかったのですが、お話を重ねるうちに、その言葉の裏にある思い

がだんだんとみえてきました。1分1秒でも命を延ばすような医療を受けたいわけではなく、自分らしく生きて最期まで自分らしい生活を送りたい。できることなら、家で息を引き取りたい。それが地域に住む方々の願いです。そして、それを支えるのが私の仕事なんだと思うようになりました。

のために講座を開いたりもされていきますか。  
**花戸** 診療所で健康講座を開いたりしていますが、宗教家の方々に感じます。看取った後、葬儀などで、お寺さんが「最期まで家でよかったね」などとご家族に声をかけてくださいます。地域の方もお互いに「よかったね」とおっしゃっていて、「最期まで家」が当たり前ということが、確かに地域の文化になっていますね。

**上野谷** 本人は在宅療養を望んでいても、家族が入院を希望するということはありませんか。  
**花戸** そういう時には、地域の人たちが「先生が往診に来てくれるんだから、このまま家で見てあげたらいいじゃない」などと言ってくれます。地域の人が支えてもらっていますね。

**上野谷** 家で看るとい文化があるのですね。そうした文化をつくるのですね。  
**花戸** そういう時には、地域の人が「先生が往診に来てくれるんだから、このまま家で見てあげたらいいじゃない」などと言ってくれます。地域の人が支えてもらっていますね。

**上野谷** その文化がほかの地域にも広がってほしいですね。研修医の受け入れも、価値観の伝播に一役買っているのではないのでしょうか。  
**花戸** 患者と病院の中しか知らないという医師は少なくありません。それでは、医療しかなできない医師になってしまいます。病院の外に一歩出れば、お互いにひとり人間ですから、人として命と向

き合った時に何ができるかも考えてほしいと思っています。できることはそばに寄り添うだけなのですが、それが患者さんにとって安心につながるのであれば、とても大切な時間です。医療以外にもできることがあるということ、研修医には学んでもらっています。  
**上野谷** 福祉も同じく、生活者としてみて、支援しています。  
**花戸** すべての医師が病院から離れるべきとはいませんが、高度な手術や専門的な治療を行う医師であっても、生活をみる視点は大切だと思います。

**自分で生きる力を**

**上野谷** 先生はお忙しいなかでも、地域に出て行く活動にも熱心ですね。  
**花戸** 老人クラブで健康講座を行うほか、学校医としての健診、小学校では各学年で1時間ずつ、「命の授業」も担当しています。

の2人の子はすでに寮生活をしていきます。私自身も中高とスポーツに明け暮れて、家では寝るだけのような生活でした。学生時代、何がいちばん自分を成長させてくれたかと考えると、出会った仲間や先生でした。だから彼らにも、ずっと親のそばにいてほしいのです。自分自身で問題を解決する力を身につけてほしいのです。

大切ではないかと感じています。  
**上野谷** おっしゃる通りですね。そのことにどうやったら気づいてもらえるのでしょうか。先生の場合、生活者としての患者さんのまなざしが常にあったからこそ、視野を広げていけたのではないかと思います。地域に出るといのがひとつのヒントかもしれませんね。  
**花戸** そうですね。診察室の外で地域の人たちに教えてもらったことがたくさんあります。地域に出て、地域の人たちから必要とされていることをその場で考えるということが大切です。

自己紹介から始まっているのは、伝えたいことが伝わりにくいでしょう。日頃から顔なじみになっていると、ちょっとしたことでも相談や報告をしてくれます。そのような日頃の関係性が、隙間を埋めるためにはとても重要なのです。いろいろな職種の人がありますが、自分の持ち場だけを支えるのではなく、みんながつながり合って永源寺というコミュニティを支えていると思っっています。特定の分野の問題点を解決するために働いているのではなく、永源寺地域を支えるために自分ができることを少しずつやっている。そういう感覚ですね。

また、地域の少年野球チームのチームドクターでもありますし、読み聞かせのボランティアグループに参加して、月2〜3回は小学校で絵本の読み聞かせもしています。それから、診療所の一部を「赤ちゃんサロン」として、子育て中のお母さんたちがお話をする場としてオープンにしています。

**上野谷** 地域に開かれた診療所ですね。  
**花戸** 医療を提供するだけではなく、地域の人が集える居場所づくりもしたいのです。  
**上野谷** 永源寺という地域にとって、先生は欠かせない人になつているのでしょね。一方で、3人のお子さんの父親でもいらつしやいます。お子さんにはどんな人間になつてほしいとお考えですか。  
**花戸** 特にはありませんが、あえて言うなら、自立してほしいというところでしょうか。中学からは永源寺から出ているのですが、上

の2人の子はすでに寮生活をしていきます。私自身も中高とスポーツに明け暮れて、家では寝るだけのような生活でした。学生時代、何がいちばん自分を成長させてくれたかと考えると、出会った仲間や先生でした。だから彼らにも、ずっと親のそばにいてほしいのです。自分自身で問題を解決する力を身につけてほしいのです。

**専門領域ではなく  
コミュニティを支える**

**上野谷** 社会福祉士や介護の専門職について、先生はどのようにみえていますか。  
**花戸** 医療も同じですが、専門性を高めることに重きがおかれすぎていると感じます。自分の目の前にあるものだけをみていけば、それでもいいのかもしれないですが、それでは自己満足なのではないでしょうか。もっと広い視野をもつ

**上野谷** 先生が評価される専門職とはどんな人ですか。  
**花戸** 専門職は、それぞれ得意分野も専門性も仕事の仕方と違いますが、それはその人の特徴であつて、評価の良し悪しではないと思っっています。ただ、多職種連携において、顔の見える関係を築

いておくということが大切。毎回

自己紹介から始まっているのは、伝えたいことが伝わりにくいでしょう。日頃から顔なじみになっていると、ちょっとしたことでも相談や報告をしてくれます。そのような日頃の関係性が、隙間を埋めるためにはとても重要なのです。いろいろな職種の人がありますが、自分の持ち場だけを支えるのではなく、みんながつながり合って永源寺というコミュニティを支えていると思っっています。特定の分野の問題点を解決するために働いているのではなく、永源寺地域を支えるために自分ができることを少しずつやっている。そういう感覚ですね。

**上野谷** 先生は、当分の間は永源寺にいらつしやいますか。  
**花戸** ずっとここにおります。  
**上野谷** 地域の人たちは安心ですね。ありがとうございます。

いておくということが大切。毎回

自己紹介から始まっているのは、伝えたいことが伝わりにくいでしょう。日頃から顔なじみになっていると、ちょっとしたことでも相談や報告をしてくれます。そのような日頃の関係性が、隙間を埋めるためにはとても重要なのです。いろいろな職種の人がありますが、自分の持ち場だけを支えるのではなく、みんながつながり合って永源寺というコミュニティを支えていると思っっています。特定の分野の問題点を解決するために働いているのではなく、永源寺地域を支えるために自分ができることを少しずつやっている。そういう感覚ですね。

自己紹介から始まっているのは、伝えたいことが伝わりにくいでしょう。日頃から顔なじみになっていると、ちょっとしたことでも相談や報告をしてくれます。そのような日頃の関係性が、隙間を埋めるためにはとても重要なのです。いろいろな職種の人がありますが、自分の持ち場だけを支えるのではなく、みんながつながり合って永源寺というコミュニティを支えていると思っっています。特定の分野の問題点を解決するために働いているのではなく、永源寺地域を支えるために自分ができることを少しずつやっている。そういう感覚ですね。